



農事普及だより

(5月号 令和6年5月1日～5月31日)

〈発行〉鶴田町／鶴田町農業支援センター／鶴田町農業振興課
つがるにしきた農業協同組合鶴翔統括支店
西北地域県民局地域農林水産部農業普及振興室
〈編集〉西北地域県民局地域農林水産部農業普及振興室



気象

(令和6年4月25日 仙台管区気象台発表
東北地方1か月予報より)

向こう1か月の予報は、天気は数日の周期で変わり、平均気温は高い確率70％である。期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みである。



水稻

健苗育成と適正施肥で、良食味・高品質米を生産しよう！

1. 育 苗

- ① 温度管理
5月は気温が高くなり、ハウス・トンネル内の温度も上昇するため、積極的な換気に努める。
降霜や低温が予想される場合は、被覆資材やストープなどで保温する。
- ② 水 管 理
かん水するタイミングは、床土が乾き、苗の葉が巻き始めた頃で、午前中に箱底まで届くようにたっぷりかける。
機械的に毎日かん水すると、草丈が伸びる割には葉齢の進まない軟弱苗となり、田植え後の活着や初期生育が劣る。育苗中はできるだけ節水し、硬い苗に育てる。
- ③ 追 肥
田植え前に苗の葉色が淡くなった場合は、1箱当たり硫酸5g（窒素成分で1g）を水500mlに溶かして追肥する。追肥後は、肥料ヤケを起こさないよう葉が乾く前にかん水して肥料分を洗い流す。

2. 本 田

- ① 畦畔の補強
畦畔にネズミ穴などがあると水持ちが悪くなり、除草剤の効果が低下したり、低温時に深水管理を行っても保温効果が小さいので早めに補強する。
- ② 「まっしぐら」「はれわたり」
■ 10aあたり施肥窒素量の目安
(堆肥1t/10a施用の場合)

土壌の種類	総窒素量	施肥体系及び施肥量
湿 田 (水はけ悪い)	6～8kg	●表層1回追肥体系の場合、基肥を総量の7～8割とし、追肥を総量の2～3割とする ●表層2回追肥体系の場合、基肥を総量の6割とし、追肥を1・2回目とも2割とする
半 湿 田 (水はけやや悪い)	8～9kg	
乾 田 (水はけ良い)	9～10kg	
砂 壌 土 (水持ち悪い)	10～11kg	

〈被覆肥料の被膜殻の流出防止について〉

プラスチックを利用した被覆肥料は、肥料成分が溶出した後の被膜殻が水面に浮上し、河川等に流出する可能性があります。
プラスチックを利用した被覆肥料を前年に施用しているほ場では、浅水代かきを行うほか、代かきや田植え前の強制落水は避けるなどの水管理を行うことにより、被膜殻をほ場外に流出させないように注意しましょう。

(4) 田 植 え

- 日平均気温が13℃以上になるときを目安とする（五所川原アメダスの平年値では5月10日以降）。代枯れ防止と活着促進のため、強風の日は避け、温暖な日を選ぶ。
「青天の霹靂」の栽植株数は70株/坪程度とし、直播栽培・疎植栽培は行わない。
- ⑤ 田植え後の水管理
田植え後は直ちに水を入れ、初期生育促進のため、低温時は苗が冠水しない程度の深水管理、高温時は浅水管理とする。
昼間止水・夜間かんがいを基本とし、掛け流しはせず、水温を上げるようにする。
 - ⑥ 除草剤の使用方法
除草剤は、前年発生した雑草を考慮して選び、使用基準を守る。なお、除草剤を適正に使用しても特定の草（アゼナ、ホタルイ等）が大量に残る水田では、抵抗性雑草が発生している可能性があるため、これらに効果のある除草剤を選択する。
初期＋中期の体系処理の場合は、中期剤の処理が遅れないように適期に散布する。
河川等の水質を保全するため、**散布後7日間**は絶対に落水・掛け流しをしない。

■ 温度管理の目安

葉 数	温 度
出芽揃～1.5葉	日中30℃以下、夜間5℃以上
1.5葉～3.0葉	日中25℃以下、夜間5℃以上
3.0葉～3.5葉 (田植え)	日中20℃以下、夜間5℃以上 田植え5日前頃には、霜注意報発令時や強風の時以外は、できるだけ夜間も外気に慣らし、丈夫な苗に仕上げる。

(2) 施 肥

窒素量が多すぎると、食味・品質の低下や倒伏、いもち病等の原因となるので地帯別、品種別施肥基準を遵守する。

① 「青天の霹靂」

■ 10aあたり施肥窒素量の目安

土壌の種類	総窒素量	基肥量	追肥量
半湿田	7 kg	6 kg	1 kg以内
乾田	8 kg	6 kg	2 kg以内
備 考	●施肥体系は表層1回追肥体系を原則とする ●基肥量は地力に合わせて調整し、追肥は栄養診断に基づいて行う ●転作後の復元初年度目の水田は施肥による生育コントロールが困難なので、作付けない		

(3) 代 か き

代かきは、田面に高低差が生じないように行う。
生わらすき込み田や田畑輪換田等の作物残渣がある水田では、残渣を土中にすき込むため、浅水で代かきを行う。

■ 水管理の目安

生 育 期	暖かい日の水深	寒い日の水深
分けつ期	3 cm程度の浅水	5～6 cm程度の深水

(7) 病虫害防除

- ⑦ 箱施用剤使用の留意点
いもち病や初期害虫等を予防する箱施用剤は、薬剤毎に使用時期や方法が異なるので、農薬の登録内容等を確認して適正に使用する。
- ⑧ イネミズゾウムシ
移植前や移植時に防除をしなかった場合は、発生に応じて防除する。
発生が多い場合には6月上旬頃に水面施用剤を散布する。水面施用剤は止水期間を7日間とし、落水及び掛け流しは行わない。また、この時期の防除によりイネドロオウムシも防除できる。
- ⑨ 葉いもち
補植育苗をほ場に放置したままにしておくとし「葉いもち」の発生源となるので、補植が終わったら直ちに処分する。
- (8) 農薬の適正使用
育苗跡地で野菜等を栽培する場合は、育苗箱用の農薬処理を育苗ハウス外で行うか、ハウス内で行う場合はビニールシートなどの無孔シートを使用するなど、農薬が土壌に浸透しないように対策する。

畑 作

適正は種で生育量を確保しよう！



大豆

1. ほ場準備

転作田では排水対策として、ほ場周囲に明きょを掘り、排水路へつなぐ。地下水位が高い場合は、簡易暗きょの設置や、心土破碎を行う。
水稻作から大豆作に切り替える時は苦土石灰などを施用し、pH6.0～6.5を目標に土壌酸度を矯正する。
水分が高い状態での事前耕起は、ほ場の物理性を悪化させるので、乾燥した状態で作業し、回数も最小限に抑える。ほ場の碎土が不十分だと、は種精度が低下して出芽むらが生じたり、土壌処理除草剤の効果が劣る原因となるので、耕うんを丁寧に行う。

4. 種子消毒とわい化病の予防

必要に応じて、下記の剤で塗沫処理を行う。

剤 名	鳥害防止	紫斑病	アブラムシ類(わい化病)
キヒゲンRー2フロアブル	○	○	×
クルーザーFS30	×	×	○
クルーザーMAXX	○	○	○

2. は種・栽植密度

は種適期は5月中旬～下旬、は種量は7～8kg/10aを目安とする。栽植密度は畦幅70cm前後、株間15cmの2本立てを基本とする。
は種直後の多雨は、出芽率の低下や初期生育の不良を招くので、気象条件に注意しながら作業する。
湿害を受けやすいほ場では、うね立ては種等で被害を軽減する。
やむを得ず、は種が遅れる場合は株間を詰め、は種量を増やす。

3. 施 肥 量

基肥は、窒素成分量で2～3kg/10aを基準とし、土壌条件、連作等を考慮し増減する。

注) クルーザーFS30

は鳥害防止効果がないので、鳥害が予想される場合は事後にキヒゲンRー2フロアブルの塗沫処理を行うこと。

6. 雑草対策

は種後、速やかに土壌処理除草剤を散布する。

「環境保全型農業」に取り組みましょう！

- 国際的な動きとして、地球温暖化防止や生物多様性保全への対応が急務となっています。
- 「環境保全型農業」とは、農業者の組織する団体等が実施する、化学肥料・化学合成農薬を原則5割以上低減する取組と合わせて行う、地球温暖化防止や生物多様性保全等に効果の高い農業生産活動等です。
- 「環境保全型農業」を行う場合、国、県、並びに町で支援を実施していますので、是非ご検討ください。



りんご

平年より生育が早まっているため、霜害防止対策をきちんと行おう！

黒星病の重点防除時期なので、薬剤の散布間隔は10日以内を遵守しよう！
結実状況に合わせた摘果を行い、早期適正着果に努めよう！

県生育観測は(板柳町五幾形)のふじの発芽日は4月4日(平年4月8日)で平年より4日早く、展葉日は4月12日(平年4月18日)で平年より6日早かった。

1. 霜害防止対策

開花期間が低温に最も弱く、落花期までは-1.5℃～-1.7℃の低温に約60分遭遇すると被害が出始める。
降霜は、晴天無風で午後7時の気温が6℃以下の日の翌日早朝に発生する可能性が高い。今年も生育が早まっており、霜害を受けるリスクが高くなっているため、霜害防止対策を確実に実施する。

- (1) 燃焼法
霜注意報が出たら、自園の気温の動きを観察し、0℃になったら燃焼資材に点火する。
- (2) 送風法(防霜ファン)
防霜ファンを設置している園地では、ファンの始動温度を2℃に設定しておく。
寒気を伴ったときや著しく低温になったときは、防除効果が低いので燃焼法を併用する。
幼果期に被害を受けた年もあったことから、結実後でもファンのスイッチは切らない。

2. 摘花・摘果

良品安定生産のためには早期適正着果が重要であるため、開花量が十分にある場合は摘花を積極的に実施する。開花量が少ない場合、また

■ 燃焼資材

種 類	利 用 方 法
A 重油 オイル缶	4リットル缶を利用する場合、10a当たり30缶以上を配置する。
霜カット	おがくず：灯油＝2：1（容量）の割合で混ぜたものを2kgずつ袋に詰め、10a当たり40～60個を配置する。

注) 1 灯油の保管量が200～1000ℓは少量危険物貯蔵届出書の提出が必要
2 灯油の保管量が1000ℓ以上は危険物取扱者の資格が必要
3 所轄の消防署に「火災と紛らわしい煙又は火災を発する恐れがある行為の届出書」などを提出する。

は降霜常襲地帯や開花期が天候不順で結実に不安がある場合は、えき芽花の摘み取りにとどめる。

- (1) 摘 花
弱い花そうやえき芽花等の不要な花そうは、全花摘み取る。
- (2) 摘 果
⑦ 人手による摘果
摘果は早いほど良いが、実止まりが判別できない時期（落花10日～15日後頃まで）にはまず一つ成り摘果を行う。
ただし、つがる、デリシャス系など年により早期落果の多い品種は、落花10日後頃までに一つ成り摘果を終える。
仕上げ摘果は、陸奥では落花15日後頃までに、他の品種は落花25日後頃までに終える。
着果量が不足気味の場合は、標準的な着果率になるように、さびや変形の程度が軽い果実を残す。
- ⑧ 薬剤による摘果
十分に着果している場合は、ふじ、王林、陸奥、北斗、シナノスイート、さんざ、早生ふじ、トキを対象に各品種の満開後2週間頃（ふじでは横径が10mm位の時）、紅玉は満開後3週間頃（横径が16mm位の時）にミクロデナボン水和剤85（1,200倍、展着剤加用）を、果実に十分かかるよう10a当たり350～500リットル散布する。

■ 標準的な着果程度

品 種	摘果の強さ（残す果実）	着果率（％）
紅 玉	3頂芽に1果	33
つがる・ジョナゴールド	3.5頂芽に1果	29
ふじ・王林・さんざ・きおう・トキ・早生ふじ・末希ライフ・千雪・シナノスイート・シナノゴールド・ぐんま名月	4頂芽に1果	25
北 斗	4.5頂芽に1果	22
陸 奥 ・ 世 界 一	5頂芽に1果	20

3. 病虫害防除

- (1) 黒 星 病
「ふじの落花20日後頃」までが最も重要な時期なので、**10日以内の間隔で散布**する。散布予定日に降雨が予想される場合は、前日に散布する。低温、多雨等で開花期間が長引いた場合には、満開を過ぎたら花が残っていても「落花直後」の散布を行う。
- (2) 腐らん病
枝腐らんは見つけ次第、切り取って処分する。
胴腐らんは再発病斑を含め見つけ次第、次のいずれかの処置を行う。
⑦ 泥巻きを行う場合は、病患部を削り取り、周辺健全部を含めて病患部に3～5cm程度厚く泥を張り付け、肥料袋などを被せる。貼り付けた泥が過乾燥・過湿にならないよう、数力所穴を空ける。
⑧ バッチレートまたはフランクツスプレーを使う場合は、周辺健全部（上下4～5cm、左右2～3cm）を含めて病患部を紡錘形に削ってから、薬液をすみずみまで塗る。
⑨ トップジンMオイルペーストを使う場合は、病患部を削り取り、さらに浸透性を高めるために周辺の健全表皮（上下4～5cm、左右2～3cm）を薄く削ってから塗る。
⑩ 胴腐らの発病が著しい樹は、病原菌の伝染源になるので積極的に伐採する。

■ 交信攪乱剤「コンフューザーR」

薬剤名	使用量	適用病害虫
コンフューザーR	100本/10a	モモシクイガ、ナシヒメシクイ、リンゴコカモンハマキ、ミダレカクモンハマキ、リンゴモンハマキ

設置点を多く取ることが重要なため、園地全体に均一に取り付け、まとめて1か所に取り付けることはしない。園地の周辺部は性フェロモン濃度が低下しやすいため、多めに取り付ける。また、性フェロモンは空気よりも重いため、園地に傾斜がある場合には傾斜の上部に多めに取り付ける。

■ 栽植距離別の1樹当たりコンフューザーRの設置本数

栽植距離	10a当たり栽植樹数	1樹に設置するコンフューザーRの本数
8×8m（普通樹）	16樹	6.25本（1樹に6本設置）
4×2m（わい化）	125樹	0.8本（5樹に4本設置）
3.5×1m（高密度）	286樹	0.35本（3樹に1本設置）

コンフューザーRの具体的な設置方法については、農なび青森に掲載している。
(<https://www.nounavi-aomori.jp/farmer/archives/8495>)

《モモシクイガ等防除のため、交信攪乱剤の積極的な利用を！》

令和6年りんご病虫害防除暦の基準薬剤に交信攪乱剤（コンフューザーR）が採用されました。
① リンゴコカクモンハマキにおいて殺虫剤の効果が低下していること
② 農薬の再評価制度に伴い、使用可能な殺虫剤が減少しつつあること
③ 高温下では害虫の发育スピードが速まるため、薬剤防除を主体とした防除ではシクイムシ類の被害抑制が困難であること
などの理由により、防除体系が変更となります。**ハマキムシ類やシクイムシ類など複数の害虫への効果が期待できますので、積極的に自園地へ交信攪乱剤（コンフューザーR）を導入してください。**

《りんご属及びなし属植物の中国産花粉を使用しないで！》

中国において、火傷病の発生が確認されたため、中国産なし、りんごの花粉等の輸入が停止されました。既に輸入された中国産花粉を介して火傷病がまん延することがないように、生産年にかかわらず、中国産花粉や来歴不明の花粉を手入・使用することがないようにお願いします。

■ 薬剤散布				
回	散布時期	基 準 薬 剤		散布量 (%／10a)
第2回	ふじの開花直前 (4月29日～30日頃)	SDHⅠ剤 ネクスターフロアブル フルーツセイバー パレード15フロアブル カナメフロアブル	1,500倍 2,000倍 2,000倍 4,000倍	320
第3回	ふじの落花直後 (5月9日～10日頃)	ミギワ20フロアブル ＋ デランフロアブル 又はチウラム剤 チオノックフロアブル トレノックスフロアブル 又はマンゼブ剤 ジマンダイセン水和剤 ペンコゼブ水和剤	4,000倍 1,500倍 500倍 600倍	350
5月中旬		コンフューザーRの設置 (100本／10a)		
第4回	ふじの落花 10日後頃 (5月19日～20日頃)	炭酸カルシウム水和剤 ＋ ユニックス顆粒水和剤47 チウラム剤 又はマンゼブ剤	100倍 2,000倍 500倍 600倍	350
第5回	ふじの落花 20日後頃 (5月29日～30日頃)	炭酸カルシウム水和剤 デランフロアブル 又はチウラム剤 又はマンゼブ剤	100倍 1,500倍 500倍 600倍	420

※農薬はりんご園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。



※ 散布月日は目安であり、天候や生育状況により変わるので、自園地の状況を確認する。

特産果樹

共通

生育が4～5日程度早まっている。生育に合わせた適期管理を行う。

- 霜害防止対策** りんご同様、霜注意報が出されたら、霜害防止対策を確実に実施する。

ぶどう

県生育観測ほ（鶴田町境）のスチューベンの催芽日は4月11日（平年4月15日）で平年より4日早かった。発芽日は4月23日（平年5月1日）で平年より8日早かった。

1. 摘芽・摘梢

養分の競合を防ぎ、日当たりや通風を良くするため、できるだけ早く実施する。

不定芽から伸びたもののうち、予備枝として利用できるもの以外は摘除する。

晩霜害の恐れがある園地では、晩霜の心配がなくなってから最終新梢数とする。

スチューベンの樹勢が強い場合は花振るい防止のため、やや多めに残し、結実の状態をみてから、最終新梢数とする。最終新梢数は主枝1m当たり8～10本とする。

シャインマスカットでは、樹勢を調節するために、展葉2～3枚以降から1回目の摘心時までには3回程度に分けて実施する。最終新梢数は主枝1m当たり空枝2本を含めて12本とする。

2. 病害虫防除

- ツマグロアオカスミカメ**
発生が多い園地では、展葉直前にモスピラン顆粒水溶液2,000倍を散布する。
- 灰色かび病**
新梢伸長期に多発生が懸念される場合は、ポリオキシンAL水和剤、チウラム剤（チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル）又はDMⅠ剤（インダーフロアブル又はオンリーワンフロアブル）を散布し、新梢での被害を防止する。
- べと病**
発生が多い園地では、スチューベンでは新梢伸長期（約20cm）にジマンダイセン水和剤又はチウラム剤、開花10日前（6月上旬）にアリエッティC水和剤、キノンドー水和剤40、チウラム剤のいずれか、シャインマスカットでは新梢伸長期（約15cm及び約30cm）にジマンダイセン水和剤又はチウラム剤を散布する。
また、発病葉や発病果房は見つけ次第、摘み取って処分する。

■ 薬剤散布

灰色かび病、黒とう病、べと病の重点防除時期なので、昨年の病害発生状況と今年の天候に応じて防除薬剤を選択する。なお、水稲育苗ハウス内にシャインマスカットが栽培されている場合、農薬散布、摘芽・摘梢等各種管理作業は、育苗箱搬出後に行う。

〈スチューベン〉				
散布時	基 準 薬 剤		散布量 (%／10a)	
新梢伸長期 (約20cm)	ジマンダイセン水和剤	1,000倍	200	200
	又はポリオキシンAL水和剤	500倍		
	又はチウラム剤	1,000倍		
	又はインダーフロアブル	8,000倍		
	又はオンリーワンフロアブル	2,000倍		
	パダンSG水溶液	1,500倍		
開花10日前	又はアグロスリン水和剤	2,000倍	250	250
	又はアディオソフロアブル	1,500倍		
	アリエッティC水和剤	800倍		
	又はキノンドー水和剤40	600倍		
	又はチウラム剤	1,000倍		
	又はインダーフロアブル	8,000倍		
開花10日前	又はオンリーワンフロアブル	2,000倍	250	250
	ベストガード水溶液	1,000倍		
	又はパダンSG水溶液	1,500倍		
	又はアグロスリン水和剤	2,000倍		
	又はアディオソフロアブル	1,500倍		
	ジマンダイセン水和剤	1,000倍		

※農薬はぶどう園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。



おうとう

1. 摘 果

紅秀峰や樹勢の弱った佐藤錦等は、結実過多により小玉になりやすいため、満開後30日頃までに摘果を行う。着果は、1花束状短果枝当たり2～3果程度とする。

2. 雨よけハウスの点検と被覆準備

老朽化が進んでいる雨よけハウスが散見されるので、被覆前に点検し、不具合のある場所は修繕する。なお、被覆時期は着色し始める頃で、例年は6月上旬頃であるが、開花時期が早い年では5月中から着色し始める場合もあるので、ハウスの点検と併せて被覆の準備をする。

■ 薬剤散布				
散布時期	基 準 薬 剤		散布量 (%／10a)	
満開5日後	パスワード顆粒水和剤 又はオンリーワンフロアブル 又はラリー水和剤 又はオーシャイン水和剤	1,500倍 2,000倍 2,000倍 3,000倍	500	
満開12日後	オーソサイド水和剤80 ダイアジノン水和剤34	800倍 1,000倍	500	
満開25日後	オーソサイド水和剤80 ダイアジノン水和剤34	800倍 1,000倍	500	
満開35日後	アミスター10フロアブル 又はファンタジスタ顆粒水和剤 又はナリアWDG 又はアンビルフロアブル 又はオンリーワンフロアブル	1,000倍 3,000倍 2,000倍 1,000倍 2,000倍	500	
	テルスターフロアブル 又はエクシレルSE 又はテッパン液剤	4,000倍 2,500倍 2,000倍		

3. 病害虫防除

- 灰星病**
花腐れ防止のため、満開5日後の薬剤散布を遅れないように適期に行う。雨が多い場合は晴れ間を見て散布する。
- オウトウハマダラミバエ**
発生が多い園地では、満開12日後と満開25日後にダイアジノン水和剤34の代わりにアディオソフロアブル2,000倍を散布する。

※農薬はおうとう園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。



注）パスワード顆粒水和剤はぶどうの「スチューベン」「パッファロー（アーリースチューベン）」「ポートランド」など一部の品種で、軽微な薬害を生じることがあるので飛散させない。

- わき芽かき**
わき芽は、傷口を早めに乾かすため、できるだけ晴天の日に行う。
- トマトトーン処理**
1～4段花房は、第4花開花始めにトマトトーンを処理する。

2. かん水・追肥

試しかん水は、1本仕立て苗は2段花房トマトトーン処理後に1株1リットル、2本仕立て苗は1段花房開花最盛期に、1株2リットル（1枝当たり1リットル）を目安に行う。
本格的なかん水・追肥は、1本仕立て苗は3段花房トマトトーン処理後から、2本仕立て苗は2段開花最盛期から行う。1回当たりの追肥量は窒素成分で約0.5kg／10a以内とする。追肥による根焼けを防止するため各液肥の基準希釈倍数は遵守する。

3. 温度管理

ハウス内の温度は昼間25℃前後で管理する。最低気温は15℃以上を目標とし、夜間冷え込むことが予想される場合は、被覆資材や暖房器具等を設置し気温の低下防止に努める。

メロソ

1. 本畑の準備

定植の2週間前に堆肥・土壌改良資材・基肥を施用し、耕起・整地する。

定植7～10日前に畦立て・マルチングを行い、地温（深さ15cmで18℃以上）及び土壌水分を確保しておく。この時、**畦とマルチの隙間を少なくし、密着させる**と雑草抑制に効果的である。

2. 定植時の留意点

定植時には、いわゆる「活着水」として、**ぬるま湯をポットにかん水**すると良い。

また、**活着水に液肥等を入れる**と発根促進に効果的である。

定植は、温暖な日を選び、夕方までに作業を終えられるようにする。

根鉢を崩さないようにポットから取り出し、深植えにならないように鉢土の上部がマルチ面よりやや高くなるように植え、株元には土を寄せない。

■ 花芽発育時の条件と果形との関係（タカミ）

【高温・多湿】 草勢が強い	【適温・適湿】 適正な草勢	【低温・乾燥】 草勢が弱い
腰高が際だちラグビーボール状、デブ生果の傾向あり	腰高で、ボール感あるタカミ本来の形状	タカミ本来の腰高形状が見られず、円形に近く、小玉

花き

トルコギキョウ

1. 定植後の管理

昼温25℃以下、夜温15℃を目標に、こまめなハウスの開閉や遮光により適正な温度管理に努める。
定植後は、活着するまで乾燥しないようこまめにかん水し、生育初期に十分な発根を促す。草丈15～20cm以降は徐々にかん水の間隔をあけ、根が深くまで張るよう心がける。
追肥は、生育を見ながら出らい前までに液肥で3～5回施用する。

2. 枝整理と摘蕾

地際から20cmくらいまでの側枝は早めに摘み取り、主茎の生長を促す。その際、付け根から除去しないと、再び側枝が発生するので注意する。また、1番花は手で摘み取れる大きさにになったら早めに除去し、その後に出荷時の開花のそりを考慮して、不要な枝と蕾を整理する。

枝整理作業は湿度が低い日に行い、作業終了後は病気を防ぐために殺菌剤を散布する。

3. 病害虫防除

灰色カビ病や斑点病は多湿状態で発生しやすいため、日中は施設内の換気に努め、登録のある薬剤を薬剤散布するなど予防を心がける。アザミウマ類、アブラムシ類等の発生に注意し、早期発見・早期防除に努める。

【農業の相談はこちらへ】

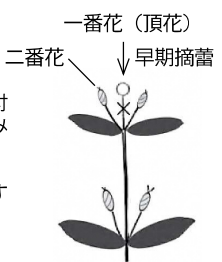
農業についての各種相談を受け付けております。受付した内容は即時対応いたしますので、気軽にご相談ください。
鶴田町農業支援センター
午前9時から午後5時 ☎22-2111（役場農業振興課）

～農事普及だよりは町ホームページにも掲載しております～
URL <http://www.town.tsuruta.lg.jp/kurashi/kurashi-nougyou/post-117.html>

町農業委員会では、毎年6月上旬から農地バトロールを実施し、遊休農地や、放任園等の発生防止に取り組んでいます。
農地の貸借や売買については、町農業委員会へご相談ください。



土壌診断に基づくバランスの良い施肥設計で、高品質花きの生産を目指そう！



春の農作業安全運動実施中

4月1日～5月31日

- 慣れた作業でも油断せず、安全を確認して、作業しましょう。
- 必ず、作業の合間に十分な休憩を取りましょう。
- 自分は「大丈夫」と過信せず、無理のない作業を行いましょう。



6～8月は「農薬危害防止運動」実施期間です

農薬の適正使用と隣接農地への飛散防止に十分気をつけましょう

山火事防止運動 強調期間実施中

4月1日～6月10日

春は空気が乾燥し、火災が発生しやすい時期です。剪定した枝等をやむを得ず園地で焼却する場合、山火事など火災の発生防止を徹底してください。



- 使用し残った農薬などは、河川等へ絶対捨てないでください。
- 農薬を使用する場合には、必ず最新の「農薬登録情報」を確認してください。
- 農薬は鍵のかかる専用の場所に保管し、管理を徹底しましょう。

